



1996年(平成8年)
5月号(No.612)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

運動と活性酸素について……………	1
白神山地の入山規制について考える……………	3
報告	
第27回山岳図書を語る夕べ……………	5
自然観察会……………	5
二火会・現地見学会……………	6
新入会員オリエンテーション……………	6
丹水会15周年集会……………	7
海外の山……………	9
東西南北	
理想的山男像……………	8
パソコン通信の山情報について……………	9
短歌・山毛樺と羚羊……………	10
韓国の漢拏山全面入山規制……………	10
武州竹寺・豆口峠……………	10
俳句・ひこばえや……………	11
ウエストンとフジヤマ……………	11
山の切手・8……………	12
支部だより……………	13
宮崎支部 秋田支部	
図書紹介……………	14
書籍受入報告・住所変更……………	16
会務報告……………	17
会員異動・ルーム日誌……………	18
INFORMATION……………	18

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

登山を中心に

運動と活性酸素について

大野秀樹

防策にも簡単に触れたい。

■活性酸素とは

「健康ブーム」の昨今、運動が老若男女の区別なく、盛んに行われている。とくに、ウォーキング、ジョギングを中心として、中高年者のパフォーマンスが目立つ。もちろん、登山も含む。しかし最近「運動は、活性酸素という猛毒の物質を体内に発生させるので体に悪い」という警告が、この「運動健康ブーム」に水を差した。

このたび、医療委員会(堀井昌子理事)より、「運動と活性酸素」というテーマで講演をする機会を与えられた(三月二十一日・ルームで開催)。ここでは、登山を中心にして「運動と活性酸素」を概説し、その予

活性酸素は、大気中の通常の酸素分子より活性の高い酸素種の総称である。一般には、スーパーオキシド(O_2^-)、過酸化水素(H_2O_2)、ヒドロキシラジカル($\cdot OH$)、一重項酸素(1O_2)の四種を狭義の活性酸素としている。とりわけ、 $\cdot OH$ の細胞傷害性が強い。フリーラジカルとは、最外軌道に不対電子を有する分子であり、反応性が高いが短命である。活性酸素の多くはフリーラジカルであるが、ラジカルでない活性酸素もある(例えば、 H_2O_2 、 1O_2)。

生体内で生じる多くの活性酸素種は O_2 に由来している。そのため、 O_2 を H_2O_2 に不均化するスーパーオキシドジスムターゼ(SOD)は、抗酸化システムの最上流に位置しているといえる。

SODは、三十億年以上前、大気の酸素濃度が現在の一万分の一でしかなかったときから、すでに生物(嫌気性菌)に存在し、その後、ほぼすべての生物で O_2 代謝に寄与している。SODによって、生物は酸素呼吸によるエネルギー産生が可能となり、紫外線の影響を受ける地上生活ができるようになった(約四億年前)、といっても過言ではない。

活性酸素は生理的状态でも、ミトコンドリア電子伝達系など酸素を利用している生体現象のあらゆる相に存在している。それに対し、生体は、SOD、ビタミンEなどの消去系を

有してバランスを保っている(図1)。過激な運動は、この生成系を促進し、活性酸素の発生を高めてバランスを破り、細胞のホメオスタシスを破壊する。現在、発癌、虚血障害、炎症、糖尿病を代表とするほぼすべての疾患に活性酸素が関与しているといわれている。

■運動と活性酸素

多くの動物実験やヒトの研究から、運動は活性酸素の発生を亢進することが明らかになった。一九七八年になされた比較的軽い運動によってもヒト呼吸中のペンタン(過酸化脂質の一種)が上昇するという観察が、それらの研究の発端となった。しかし、軽・中等度の負荷の運動で生じた活性酸素は、生体内にSOD、ビタミンEを中心にして巧妙に作られている抗酸化システムによって速や

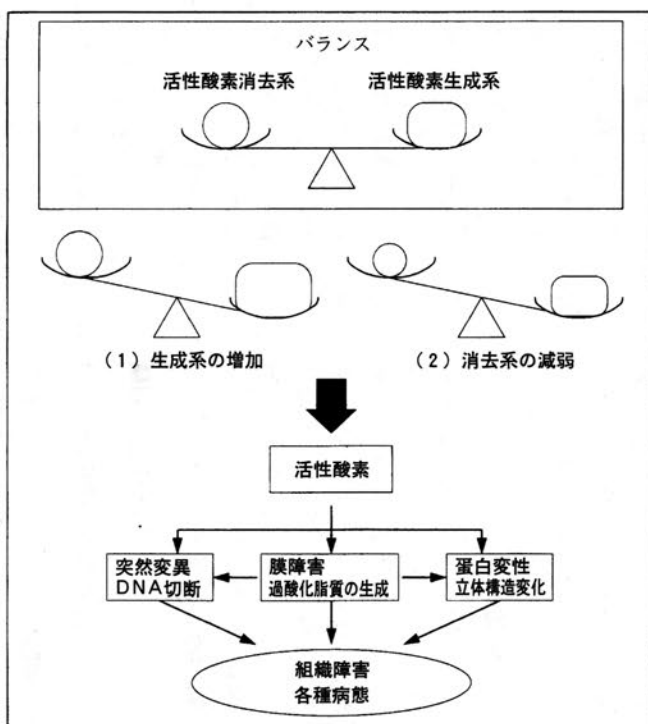
図2 血中過酸化脂質濃度 (Simon-Schnass, 1994)
[平地濃度(nm/gHb)に対する%表示]



表1 高度と紫外線 (UV)
(Simon-Schnass, 1994)

高度	UV-A	UV-B
1,000 m	17 %	20 %
2,000 m	27 %	35 %
3,000 m	34 %	50 %
5,000 m	44 %	70 %

図1 活性酸素による生体障害の成立モデル
(手嶋, 六反, 1996)



かに消去され、生体に大きな影響を及ぼさないと考えられている。加えて、繰り返しの運動を行うこと(運動トレーニング)によって抗酸化システムは増強する。

一方、激しい運動では酸素消費量が増大し、活性酸素の生成も著明に増加する。その結果、とくに骨格筋と意外にも肝臓にダメージを生じる。実際、筆者は、九十三時間にわたり三〇〜四〇kgの完全装備を身に付けて山野を行動するレンジャー訓練で、骨格筋と肝臓が酸化的ストレスの影響を強く受けることを明らかにした。とりわけ、肝臓は活性酸素によると思われる肝機能障害が八日間以上続いた。

すなわち、ある閾値(まだ詳細は不明)を越える激しい運動では、活性酸素生成系が消去系より優位となり、大量の活性酸素が発生し、生体が傷害される。

■登山と活性酸素

図2は、エベレストのベースキャンプ(約五〇〇〇メートル)に二週間滞在した後の血中過酸化脂質濃度を示している。ビタミンE摂取群(四〇〇mgを山行二週間前から毎日摂取している)では変化しなかった過酸化脂質濃度が、非摂取群(食餌中に一日平均一六・八mg)では二倍以上

に上昇した。K2のベースキャンプ(約五〇〇〇メートル)でも、呼気中ペンタンに同様の変動が見られた。これらの事実、ビタミンE非摂取群では、高地において活性酸素の生成が高まっていることを示唆している。

低酸素状態にもかかわらず活性酸素が増加するメカニズムはよく分かっていないが、白血球・血管内皮細胞相互作用が原因の一つではないかと推測されている。つまり、低酸素状態で活性化された白血球が自身と内皮細胞上に接着因子を発現して粘着し、それぞれの活性酸素生成系が賦活化して活性酸素が発生する。活性酸素の増加は、高所での紫外線レベルの増大(表1)、昼夜の大きな寒暖差により一層加速される(UV-Bは波長二八〇〜三二〇nmで、最も生物作用が著しい。UV-Aは、波長三二〇〜四〇〇nmで皮下脂肪を過酸化化する)。

筆者は、ラットを長期間低酸素状態(高度五五〇〇メートルに相当)におくと、肝臓が活性酸素の影響を非常に受けやすくなることを認めた。登山は、低酸素曝露に加え、レンジャー訓練ほどではないにしろ激しい運動を伴う。

活性酸素発生源の相乗状態である登山を日常的に行っている人は、定期的に肝機能チェックを受けたほう

がよいかもしれない。

■登山と酸化ビタミン

以上述べた理由で、長期間の山行より高所を目指す登山(明確な基準はまだないので、ひとまず四〇〇〇メートル以上)では、酸化物質を積極的に摂取したほうがよい。SOD、グルタチオンなど種々の酸化物質が存在するが、簡便さ、安全性効果の面から見て、登山には、ビタミンE、Cおよびβカロテンなどのビタミン剤の服用を勧めたい。服用法は、山行二週間前から二週間後まで、毎日ビタミンE・一〇〇〜四〇〇mg(一五mg)、C・二五〇〜一〇〇〇mg(五〇mg)、βカロテン・一七〇〇〜五〇〇〇単位(ビタミンAとして二〇〇〇単位)である(カッコ内は成人一日必要量)。とりわけビタミンEの服用が重要である。

■終わりに

これまでに明らかにされた事実に基づいて、「運動(登山)と活性酸素」をごく簡単に解説した。しかし、この分野はまだ本格的な研究が始ま

ったばかりで、不明な点が少なくない。そのため、登山における酸化ビタミン剤の効果を通信することな

白神山地の入山規制について考える

中村純二

一九九三年十二月、白神山地(一六、九七一ヘクタール)は世界遺産一覧表に登録された。白神山地はブナ原生林の生態系が広域に残された数少ない地域であって、これまで青秋林道に反対の立場をとってきた私どもにとっても、喜ぶべき決定であった。しかし登録されたために、観光客の増加や地元自治体による観光地化の思惑から、道路の拡幅、あるいはヘリコプターによる遊覧飛行計画など、新たな問題を生じようとしている。

ユネスコの世界遺産委員会から統合された管理計画策定の勧告を受けた環境庁、林野庁、文化庁の三庁は、一九九五年十一月二十一日付で「白神山地世界遺産地域管理計画」を発表した。これによれば核心地域への立ち入りについては「自然環境の保全上支障を及ぼす恐れのある行為は学術研究等特別の事由がある場合を除き、各種保全制度に基づき厳正に規制する」とし、とくに「既存の歩

く、あくまで補助的な役割と理解して、安全に登山を楽しんでいただきたい。(防衛医科大学校衛生学教授)

道を利用した登山等を除き、本地域への立ち入りは規制する」ともしている。しかし「なお、規制の態様については、入り込みの状況、地元の意見等を踏まえ、さらに検討を進める」と記し、いわゆる玉虫色の結論となっている。この結果、現在では三庁主導の下に、青森県、秋田県、地元自治体の関係者や有識者を含む白神山地協議会が作られ、細部の検討が行われようとしている。

この問題は登山者の間でも関心を高め、各登山協会や団体においても議論を呼んでいる。ここに一会員としての私見を述べ、皆様にも共に考えていただければと期待している。

■地域の伝統文化を守りながら規制を考える

登山は本来、人間の自由な意思に

基づく行動である点に、魅力と特徴がある。このため、登山に規制などあってはならないとする意見もみられるが、自由な行動には当然責任が伴うものであり、その責任が万全と考えられない場合には、勧告や規制もやむを得ないと考える。

劔岳や谷川岳の積雪期登山では、技術や経験不足による遭難事故の多発が予測されるので、登山届による規制や勧告が条例として実施されている。

核心地域においても、入山者による環境破壊が予想されるならば、応分の許可制度や勧告は必要と思われる。現状ではすべての登山者に十分な環境保全の意識を期待することができないのは明らかであるからだ。

白神山地では、その豊かな生態系を後世に伝えるため、これに取り返しのつかない変化を与えたり、破壊をひき起こしたりしないことが、何にもまして優先されなくてはならない。入山規制の問題も、この観点から眺める必要がある。

森林の中に踏み跡ができて、頭上の林冠に穴が開くこともなく、水系が変わることもない。モグラも自

今年もさげん会で会いましょう

白神山地世界遺産メモ

- ◆世界遺産条約は1972年の第17回ユネスコ総会で採択され、1975年発効。わが国は1992年6月批准。
- ◆1993年12月、世界遺産委員会（コロンビア）において屋久島、白神山地が「世界遺産一覧表（自然遺産）」に登録。
- ◆遺産地域の管理区分・面積
 核心地域 10,139ha
 緩衝地域 6,832ha
 計 16,971ha
- ◆1995年11月、環境庁・林野庁・文化庁による管理計画の決定。

由に横断できる。しかし一旦車道や舗装された遊歩道などが通じると、一雨ごとに表面には濁流が流れ、林冠も開いて生態系のバランスは崩れていく。さらにこの影響は次々に両側へと広がっていく。伐採やダム建設は、この傾向にさらに拍車をかけるものである。

地元の人々は縄文の時代から、山菜やきのこを採りに山に入り、沢ではイワナや、溯上してくるサケを捕り、気持ちのよい森の中で思索をして、伝統的文化を築き上げてきた。このように人々が山地や沢に分け入り、翌年のために山菜の根や稚魚を残すような採取法を続けている限り、生態系は決して大きく傷つけられることはない。ところが、林道や堰堤の開設に伴い、最近では他町村や他県からも車で山菜採りや溪流釣者が訪れ、中には根こそぎ、あるいは稚魚

まで持ち去るケースが出てきている。最も被害の著しいのは営利目的で入山し、アルバイトまで使って多量に漁っていくケースである。

このような状況では規制は当然必要ではあるが、地元の人々には鑑札などを発行し、入山を認めてもよいと思う。これは地域の伝統的文化を守る面からも、また不法採取者の状況把握の面からもむしろ必要である。これに対し、他町村からの採取者は届け出制によって厳正に制限し、営利目的の採取は行わないようあらかじめ勧告すべきだと考える。

■入山者には届け出認可制を

登山者に関してはどうかだろうか。これまでのような沢歩きや雪の稜線歩きなどは、歩道外であっても、生態系にはさして影響を与えないと思われる。しかし夜盛大な火をしたり、イワナや山菜の採取を主目的にしたり、大パーティーで入山して踏み荒らしやゴミの残置が目立つようになれば問題は大きい。一方登山が目的でなくとも、自然の豊かさに触れ、実地に探求もしたいといったパーティーには、教育的見地から入山を許可したいものである。

いずれにしても、これら入山者には届け出認可制と同時に、遵守事項の勧告を行うことにより、環境保全

のPRにもなると考えられる。

■合理的かつ弾力的な運用を

ここで問題になるのは入山届の判定をだれがどんな規準に従って行うかという点であろう。地元住民への鑑札の発行とか、入山下山届の提出については、地元自治体が積極的に乗り出さなくては事が進まないし、登山届に関しては、しかるべき山岳連盟や支部、あるいは学術機関の協力がどうしても必要である。さらに応分の予算や監視体制作りも必要になる。その他きめ細かい取り決めも必要であって、今後協議会の審議はますます重要かつ不可欠のものになってくる。

この際、当会でも自然保護委員会が中心となって、青森、秋田両支部とも協議を重ね、白神山地協議会に対し、積極的な発言や提言を是非行っていたくよう切望してやまない。そして今後、白神山地の入山については、合理的かつ弾力的な規制の運用がなされ、素晴らしいブナ原生林が、より多くの人々に感銘を与え、環境の保全や文化の向上にもつながることを心から期待したい。

◇ ◇ ◇

世界遺産地域に関連して、最後に強調しておきたい点が一つある。それは遺産地域の今後の存続を考える

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社／酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

場合、今回指定された一万七千ヘクタールだけでは面積が不十分である点だ。すでにクマガエラの営巣地のいくつか、これら遺産地域の周辺地域で発見されていることから、理由は明らかである。

この際、世界遺産地域の核心地域、緩衝地域を取り囲む形で、準緩衝地域とでもいった地域を早急に設定し、そこでは現在の植林地を天然林に移行させるような森林施業方式をとるとか、歩道を整備して、人々は歩いて遺産地域にアプローチすることができるよう、遺産地域の生態系がよりよく後世に伝えられていくことを、強く訴えたいと思う。

報 告

REPORT

第二十七回山岳圖書を語る夕べ

スイス山案内人の手帳より

図書委員会

三月一日夕刻、日本山岳会集會室において、表記著者の岡澤祐吉会員を講師に招いて「第二十七回山岳圖書を語る夕べ」を実施した。

昨年同氏は、グリーンデルワルトにサムエル・ブラヴァント氏を訪問し、その際グリーンデルワルトガイド組合編集のビデオ「EIGER, MITTELBOGI GRAT」を入手して帰国している。

簡単に右記ビデオの解説後、観賞ドイツ語だが、素晴らしい映像に



スイスの「案内人手帳」を語る岡澤会員

ミッテルレギー稜のなんなるかを知ることができた。

過去には山岳会の先輩たちや、このビデオで見たような横有恒氏の登山に興味を抱いて、人々がたびたびスイスを訪問。ブラヴァント氏や他のガイドと共に登山をしてきた。そういった往時の様子を聴取し、書き物にまとめてみました、と著者は話し始めた。

そのきっかけは、七八年に著者がスイスの政治の町フルティンゲンの裁判官である友人宅に宿泊中、当の友人がブラヴァント氏に電話で著者のことを紹介してくれたことだったという。友人のお陰でブラヴァント氏宅を訪問した時、予期しなかったことに「自分にも古きよき日本人の友人がたぐさいるぞ」といわんばかりに、横氏とミッテルレギー稜初登時のメモなどが書かれた「案内人手帳」を見せてくれ、それを手にすることができた。

このような貴重な「案内人手帳」の存在に気付いた著者はブラヴァント氏の協力を得て、往時の山案内人

たちの手帳を捜し始めたとのこと。

また、これらの手帳の中に登場する邦人には著者が未知の方も多く、山岳会の会報などで呼びかけたところ、多くの方々の所在が判った。そして本人あるいは家族の方々との情報交換に基づき、往時の素晴らしい邦人の登山実績を世に知らせることができた。

横氏に同行した三人のガイドの一人、フリッツ・シュトイリ氏所蔵の「案内人手帳」と同サイズのコピーが回覧され、各国語に混じって日本語で記された横有恒氏の登頂記念ページに、満室の一同は感激の声を上げた。

(南井英弘)

自然観察会

東大秩父演習林で

自然保護委員会

三月十六、十七日に秩父栃本にある東大秩父演習林の見学会が行われた。正直いって新参者の私には委員会の活動内容もよく分からず不安であった。だが、私の大好きな樹木であり、一番の関心事であるブナを見ることができ、しかもブナ研究の第一人者である宇都宮大学元教授の前田植三先生のお話が聞かれるとあって、夫を誘い込んだので参加であった。

当日は朝から薄曇りのはっきりしない天気であった。午後一時に西武秩父駅に集合した総勢十三人、初対面の方々と合流したときには緊張の極に達していた。

出迎えの民宿「甲武信」の主人千島兼一さん(本会会員)のマイクロバスで荒川沿いに栃本に向かう。秩父市内では梅が見事に咲いていたが、進むにつれて冬の名残の風景が目につく。秩父湖は一部凍っていたが、近年にないことだそう。三時頃宿に着いたが、明日の天気が不安定なので今日のうちに演習林を見学することにして、そのまま車を走らせる。演習林の樹木園では、東京大学農学部 梶幹男教授が案内してくださる。前日、東京は雨だったが、ここ秩父の山では雪が降ったようで、残雪が私たちの前進を妨げる。

演習林は約五〇〇〇ヘクタールという広い領域の山で、標高差が一四五〇メートルあるという。そのため冷温帯と亜寒帯の森林があり、樹種も多様であるとのことだ。歩を進めながら前田先生と梶先生は、それぞれのグループに説明してくださる。尾根にはツガ、ヒノキなどの針葉樹、沢沿いにはシオジ、サワグルミ、中間はブナ、イヌブナなど、歩いてみると一層はつきり分かる。ほんの少し春の芽吹き準備をしている木も



樹木園で説明する前田先生

くださる。日本とヨーロッパの森の違いなど、興味深く見た。適度にアルコールが入って、よい気持ちにもなっていたが、私には吸収するものが多々あった。

翌日は雨、それもかなりの降り方である。朝食後、前田先生の昨日の講義の続きを聴く。宿のご主人に三峰神社まで送っていただき、春雨にける神社に参拝して帰途についた。

(川越尚子)

現地見学会

筑波・地質標本館ほか

二火会

あってうれしい。宿に帰り着く頃には雨が降り出してきた。一つしかない温泉に順番待ちで入り、夕食までのひと時、炬燵を囲み雑談にふける。後から来られた一人も加えて、一段と話が弾む。夕食は盛りだくさんの山の幸のご馳走で、大満足であった。囲炉裏がまた私の心を和ませてくれる。忘れていた昔懐かしい優しい気持ちを感じる。

夕食後、八時半からいよいよ前田先生のブナの話とスライドである。ブナの仲間のことや更新の仕方など、具体的な分かりやすいお話である。スライドは日本のものだけでなく、世界各国でのご研究の成果を見せて

データとともに展示しているもので、その規模、内容、展示方法は斯界では第一級のもの。岩石の薄片づくりまで見せてもらって、非常に興味深いものがあつた。

(伊藤 敏)

新入会員オリエンテーション

四十五名が一堂に集う

総務委員会

去る三月十六日、第二十二回新入会員オリエンテーションが本会ルームにおいて開催された。今年の対象者は二百八十一名であるが、当日は大分、愛知、岩手など遠路からの参加もあり、四十五名の新入会員が、また、委員・役員を含めると総勢六十五名が一堂に集うこととなった。

参加者に感想を述べてもらおう。

「村木会長、大屋常務理事のお話に登山は文化活動であることを認識し、山岳会の歴史と伝統を改めて痛感しました。

また、松田雄一評議員の記念講演

『ヒマラヤを越えるツル』では、ヒマラヤ山塊に比べ、あまりにも小さいアネハツルたちのけなげで神秘的な渡りの話に感動し、目頭が熱くなりました。その後の意見交換会は、十八歳の私にとっては少々緊張の時間でしたが、歓迎親睦パーティーでは楽しく過ごすごうことができました」

(二二〇二〇 木本慶太郎)

「第一線の登山家たちの中で一人中高年は小生のみ、という予想をして



まいりましたが、見事に外れました。出席者の平均年齢は五十代半ばで、それぞれの分野で達人ともいえる方々でした。山とそれを取り巻く地域の自然科学、人文科学、芸術などについてお話を伺うことができる新しい世界が開けたように思いました」

(一九九三 利部輝雄)

このほか、これまで同様に今年度も同期会結成の呼びかけがなされ、その最初の集まりとして四月十四日に陣馬山への登山計画が披露され、喝采を浴びていた。(熊谷友昭)

丹水会十五周年集会

記念行事と権現山・屏風岩山行

丹水会

十五周年集会・十一月十八日

丹沢の清き流れとALCOHOLをこよなく愛する仲間の集い丹水(堪酔)会が十五周年を迎えた。山岳会の老齢化に準じて丹水会も小刻みに記念集会を行うこととした。記念行事、記念品、記念イベント、記念講演、記念山行……などの話し合いのための幹事会がもたれたのは九月四年二月十二日、丹沢「ロッジ峠」においてであった。

十周年での経験を生かしながら幹事それぞれが仕事を分担し、幹事会

を重ねて十五周年集会を十一月十八日に迎えた。西丹沢中川温泉「ハイッ・ピラ中川」に集まった参加者は五十八名。会員通信「丹水」および今回の記念誌「丹水二号」を手に語り合う、半年ぶりの懐かしい人たちが六時から恒例の記念講演。今回は幹事・近藤信行さんの「今西さんとの山行の思い出など」とくに今西さんの三角点の儀式については興味深く聞く。講演のあとは酒宴。引き続き恒例の「堪酔会」は夜の更けるのも忘れて語り明かす。

なお、今回の記念品は石川治郎さんの「甦れ丹沢」の墨絵記念絵はがき、往時の丹沢の樹林の幽玄な景観が甦ってほしいとの作者の願いを込めた作品で、なかなかの好評であった。着やすさが評判の「丹水」と染め抜いた法被も再び作り着用。翌日は二手に分かれて山行となる。

(細井澄子)

記念山行・十一月十九日

●権現山

昨日に続く快晴、今朝は一面霜がおりていた。今日の山行は宿の目の前の権現山と屏風岩山なので、皆のんびりと支度をして予定より三十分の遅発。集会だけで帰る人に見送られて、二本杉峠に向かう。この峠は、かつて林業が盛んな時代には、分校もあってにぎわった集落、地蔵

平との重要な峠道であった。ここからの富士の眺めは素晴らしいのだが、今は植林した木が伸びて、その眺めはない。下を林道が通り、歩く人も少なく荒れ果て、かつ檜や杉の苗を鹿から守るための防鹿柵で何箇所もはしごを越えなければ通れない道だ。また二本杉峠から先の地蔵平までは道も崩壊し、廃道と化している。

今日は二手に分かれ、北は屏風岩山、南は権現山へ。この二つの山は山歩きの対象から外れたほとんど山道の手入れもされていない、いわゆる躰曲がりの登る山でもある。北の屏風岩山は南面の山で、茅が相当伸びていることと、距離が長いので、元氣組。権現山は北斜面で歩きやすいと判断し、のんびり組。共に踏み跡はあるが、指導標はない。

権現山はいきなり急登となるが、しばらく続いた晴天と、落ち葉の中のかすかな踏み跡を丹念に拾いながらの歩きで、苦を感じない。予定通りの時間で山頂に着き、足元の丹沢湖を眺めてビールで乾杯。昼食をとって、もと来た道を引き返す。日だまり散歩にちょうどよいのんびり山行であった。(古谷聖司)

●屏風岩山

二本杉峠から分かれた一行十五名は、北の稜線を屏風岩山に向かう。この稜線は入る人が少ないのか、南

斜面のためか、茅戸がひどいと聞いているが、分岐からはそのような感じは受けない。しばらくは急な坂道が続く、やがて茅戸やザレが出てきて、やや苦勞する。

二時間ばかりで山頂に着き、昼食のため大休止。山頂の視界はあまりない。帰路は時間は少し余計にかかるが、比較的荒れていないと思われる大滝峠にコースを取る。大滝峠はコルになっていて、一旦登り返す。後は自然歩道を大滝橋までのんびり下り、車のおいてある中川温泉に戻った。(滝沢芳章)

会友作品展・十二月二〜六日

十周年では、塔ヶ岳で会友の作品展を行ったが、一般の人にもアピールするには「人の集まるところにしよう」という山本幹事の提案で、今回は厚木市の中心地、厚木プロミティビルの展示場を借りて五日間開催した。PRの不手際や最終日がウィークエンドにからなかったもので、閑古鳥が鳴くのではないかと心配したが、連日そこそこの方が見にこられ、会のPRもかねて成功裏に終わった。出品点数(絵、版画、写真、工芸)三十二点。(古谷聖司)

●なお、丹水十五周年記念墨絵はがき「甦れ丹沢一六枚一セット」四百円はルームにもあります。連絡・細井まで。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどし投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします）



カット 中村あや

理想的山男像

栗林一路

最近の登山界は何をするにも基準がなく、目標も見失っているような気がします。その上、望ましいアルピニスト像も定かではありません。植村直巳もメスナーも、その記録の素晴らしさにもかかわらず、誰もその後についていけないのは、なぜでしょうか。

いまいけば山に熱中できるはずの青少年が山を去り、そのかわりに生活に疲れた中高年が「アウトドア」という正体不明の言葉に踊らされて進出しました。巷では「自然にやさしい」といえば、すべて許されるという奇妙な錯覚が横行しています。スキー界でも同じこと、足首の曲がらない靴を使うことが、あたかも

近代的技法であるかのように宣伝され、登高の喜びを奪ってしまいました。ダウンヒルオンリーのスノーボードの流行が、このことをよく象徴しています。このような現象に、山のベテランたちもとまどい、半ばあきらめ顔で「今は価値の多様化時代だから」と責任を世相に転嫁し、自ら対策を講じることを放棄してしまっているように見えます。

そこで私は原点に戻り、自然（山）と人間の関係を考え直すために、別掲のような図を描いてみました。本当はここに加えなくてはならない東洋思想は、あとで補うこととして、まず西洋文明の流れをまとめてみましょう。教育大・岸野雄三氏の資料やその他の文献を参考に、それぞれの時代にヘゲモニーを握った国家とそこに誕生した「理想的人間像」を経年的に並べました。

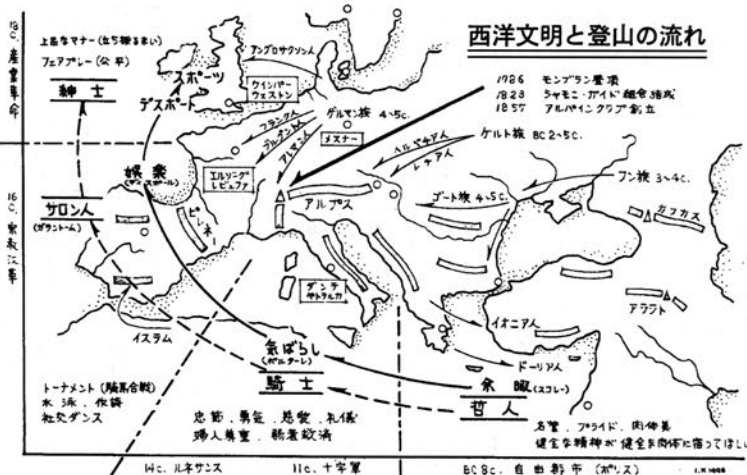
実線はスポーツ・娯楽の言語的ルーツをたどり、破線は理想的人間像の変化を示します。哲人（ギリシャ）騎士（ローマ）、サロニン（仏）、紳士（英）とタイプは違っても、そこに共通するのは技と体力の賛美、詩とダンスの教養、聖母崇拜に根ざしたレディー尊重の精神、というのはいずれも深いことです。

西洋人の考えるアルピニスト像には、当然これらが含まれているはずですが、日本人は登山技術の吸収だけに目を奪われて、この文化的素養に気づきませんでした。果たして私たちに、これらのうちどれが備わっているのでしょうか。しかも残念なことに、我々の祖先がせっかく残してくれた山岳信仰という貴重な遺産の価値をも軽視して、忘れてしまったのです。

近代登山が一七八六年のモンブラン登頂に始まるとすれば、体育数千年の歴史に比べて、たった二百年の歴史しかありません。しかし産業革命以後のいちはば文化的絢爛たる時代のなかで、近代登山は形成されたのです。そこで「スポーツは時代の要請によって生

まれ、理想的人間像の完成のために奉仕する、というのが私の結論です。十九世紀の世紀末は、新思潮とデカダンスが一世を風靡しましたが、二十世紀のそれは地震、サリン、金融破綻で大揺れです。私たちは二十一世紀の到来を目前にして、どんな理想的人間像を想定したらいいのでしょうか。それによって理想的山男像の質も形も違ってくるのだ、と思います。

西洋文明と登山の流れ



パン通信の山情報について

松尾良久

私は一年ほど前からパソコンを使い始めました。俳句をやりたいと思ってPC-VANに加入し、ぼつぼつと通信を始めています。たまたま日本山岳会データベース委員会のメンバーである後輩と話をしているうちに、委員会の仕事に興味を覚えて、手伝うことになりました。元来私は機械に疎く、職場が電機関係でなければパソコンなど見向きもしなかったと思います。委員会の仕事も、どれほどできるか甚だ心許ないのですが、情報化時代への流れだけは理解できます。そこで、山岳会の百周年に向けての重要なテーマに、少しでもお手伝いができればと考えています。

そんなことで、一月末NIFTY-SERVEのフォーラムの一つである「FYAMAP 山と地図」の主催者の方たちと、松田雄一会員の紹介でルームでお目にかかり、懇談することができました。

そのとき印象に残ったことは、パソコン通信を通じての交流は、個人個人の自由意思による自発的な行為であって、強制されるべきものでもないし、山岳会の仕事として通信を

海外の山

ふたつのK2

江本嘉伸

ヒマラヤ八千メートル峰の中で、第二位の高峰だけは、記号で呼ばれている。エベレストに対する「チョモランマ」と同じように「チョゴリ」というチベットの呼称がのちに判明するのだが、インド測量局のイギリス人たちがつけた測量番号「K2(カラコルム第2峰)」のほうが定着してしまった。ちなみに他の測量番号K1は「マッシュブルム(雪の壁)」、K3、K4、K5は「ガッシャブルム(輝く壁)」とのちに名を持った。

そのK2に、この五月日本のユニークな二隊が挑戦する。まず「日本F・O・S K2登山隊」は、隊長の戸高雅史(三四)が、南壁ククチカ・ルートの単独・無酸素・アルパインスタイルによる登頂をねらっている。

登山隊といっても、戸高以外の日本人は、ベース・マネージャーの妻の優美(二七)だけ。単独行、と言ったほうがわかりやすい。

福岡教育大学の探検部で登山、洞

穴探検、川下りに熱中した戸高は八五年、アンナプルナII峰南壁隊に参加したのを手始めに高峰登山に魅せられてゆく。

一九九〇年のナンガ・パルバット登山の前に大分県の商業高講師の職を辞し、御殿場の自動車部品工場の期間労働者となった。働きながら富士山頂トレーニングに徹することが目的で、御殿場口から毎週富士山に登り、火口を走りまわった。ヒマラヤを目指す鍛錬は三七七六メートルの富士山のとっぺんしかない、と戸高は思い決めている。

ナンガ・パルバットでは南西稜から単独登頂を果たしたが、僚友を亡くした。九三年にはガッシャブルムII峰(八〇三五メートル)に無酸素登頂した。

そして、九五年七月ブロードピーク縦走という画期的な登攀を成功させる。戸高をリーダーに三人のメンバーで北峰(七五五〇メートル)中央峰(八〇一六メートル)主峰(八〇五一メートル)を無酸素・アルパインスタイルで七日間で踏破したのである。八四年にポーランドの最強の二人クルチカとククチカがやってのけた難ルートの第二登だった。

その戸高の今回の挑戦は、K2南壁ソロ。隊の名「Feeling

of Sou」が示すように、戸高自身の生き方、感性が試されようとしている。

もう一つ注目されるK2が、この会報でも紹介された「日本山岳会青年部K2登山隊1996」だ。エベレスト、ナムチャバルワ、マカルーに登頂した山本篤を隊長に、大学山岳部の若手OBで固めた十八人が南東リブ・ルートから挑戦する。

登攀メンバーは、三十三歳の隊長を最年長に平均二十六歳。日頃若年寄りや大年寄りが目立つ日本山岳会の隊としては画期的である。

副隊長の松原尚之(三一)は、勤務先のビル会社から一年二か月の「長期休暇」をもらって南極点探検隊に参加して話題になったことがある。帰国後復職して営業の仕事に明け暮れていたが、ある日、日本山岳会の会報「山」に載った「マカルー隊員公募」の告知を見て決心する。「会社を辞めてマカルーに行く」。

松原を含め、「職なし青年」ばかりの隊員であることも何かと話題になっているようだが、私見では、仕事を二年や五年持たなくとも、ヒマラヤや極地に行く若者のほうが将来必ずいい仕事をする。何よりも今の日本山岳会からよくぞこれほど若い隊が出たものだ、と感心する。

利用しても続かないのではないか、
という発言でした。

これについては、データベース委員会でも話し合いの結果、パソコン使用の習熟をはかるための一手段としてデータ通信への試行を決め、実践を通じて情報を収集する、ということになりました。あくまで個人の立場で参加し、パソコンを扱って

短歌

山毛櫟と羚羊

大橋克也

去年^{コソ}会いし同じ谷なり新芽^{コソ}噴く山毛櫟の林の蒼き羚羊

この場所を秘めておくよと新芽^{コソ}喰む羚羊と話す独り来し山

古きより攪りし跡か亜麻仁油で磨きし如き險路の木根は

攀ずる手の余多の汗に磨かれて岩を抱ける勁き木の根は

この滝を攀じゆきし跡か飯粒^イの白く沈める淵を跳び越ゆ

もう登るなど言わるを怖れ滝壺^マに転びし傷を独り舐めいる

る会員の方々と山の情報などを交換できればよいのではないかと、NIFTYの会議室にメンバー参加した次第です。早速、通信で主催者と話したところ、FYAMAPとしてもJACメンバーが参加することは大いに歓迎する、とのことですので心強く感じています。

ここで「山の展望と地図のフォーラム」について紹介します。「山の展望と地図のフォーラム」(FYAMAP)は、パソコンワープロ通信最大ネットのニフティサーブ内の集まり(フォーラムと呼称)です。その名のとおり山と地図が大テーマになっています。一九九四年十月に開設された比較的新しいフォーラムですが、活発な活動を行っており、一九九六年一月には会員が一人を超えました。このフォーラムの特徴は、パソコン、ワープロ通信ならではのリアルタイムの情報交換(登山報告など)以外に、山岳展望シミュレーションソフトをはじめ、各種山岳、地図関連ソフトやデータ類を開発、作成していることです。主催者は田代博氏(ID:SDI00790)です。

今後の経過は逐次ご報告したいと考えています。パソコン通信に興味をお持ちの方、また現在通信をやっている会員のご連絡をお待ちしています。

ます。

NIFTY-SERVE

ID:VYH05400

PCIVAN

ID:NUN76627

松尾良久(穂高子)

海外自然保護情報 韓国の漢拏山全面入山規制

石田稔郎

韓国の国立公園では、自然保護のため入山を禁止されたコースが各地にかなりある。これは、国立公園管理公団の自然保護対策が徹底しているからである。

濟州島の漢拏山^{ハルサン}(一九五〇メートル)は韓国国内でも人気が高く、日本人にも人気があり、登山者や観光客でにぎわう山である。火山性の山のためか頂上稜線の崩壊がひどく、西北面と南面のコースが自然保護のため、登山が禁止されていたのであるが、一九九六年三月一日より三年間、標高一五〇メートル以上が入山禁止となった。

具体的には、西面登山口のオリモク・靈室^{リョウシツ}コースは、これまで同様、ウィッセオルム待避所^{テビソ}(避難小屋一七四三メートル)、南面登山口のトンネココースは全面的に入山禁止。

東面登山口の城板岳^{ソンバンダク}コースはチンダルレバツ(ツツジ畑)小屋まで、北面登山口の観音寺^{カンナムサ}コースは竜鎮閣^{リョウジンカク}小屋まで入山できる。これは濟州島の国立公園管理事務所^{ナショナルパーク}に問い合わせた情報である。しかし、漢拏山のツツジは素晴らしいので、開花期にはウィッセオルムまで登ってみるべきである。

武州竹寺・豆口峠

滑志田隆

名栗川に水は乏しく、川底の岩が所々に露出していた。

三水会とエーデルワイス・クラブの奥武蔵山行、二月恒例の小さな山旅はいつも寺院の参詣を組み入れる。二十二人が参加、竹寺から豆口峠を経て子の権現へのコースを取った。「今の季節(二月中旬)はいつも水が足りないが、この数年間は異常。都会の水不足が心配だ」とタクシの運転手が語りかけてきた。森が水を貯めなくなった。彼の解釈によれば、水量が減った理由は上流の広葉樹林を伐った後、杉ばかりを植林してきた影響という。その杉林も木材価格の低迷により、伐採後赤土をさらしている場所が多いという。

目的地の天王山八王寺は神仏混淆

俳句

ひこばえや

富士田鍊子

丘一つ白鳥のごと残雪期
五月の森昔緑に吸われた記憶

—シルクロード—

喀什や既視感ありてカンナ咲く
モスク昏し異邦人とし夏衣

この遺跡詩城といえり星月夜
下山かな川に解けゆくひと日の道

*

梅擬山離れしより山翳る

ひったりとうちて湖昏吾亦紅

木の実落つ今日の山旅明日は海

ひこばえや今日のいとしき明日の
いとしき
(所属海程)



の寺である。境内は竹林に覆われ、一般には竹寺の名で親しまれている。寺の背後の丘の上の鐘楼まで、ゆっくりと登った。「いくら撞いてもかまいません」との掲示。そのおおらかさに、旅人への優しい気遣いがある。遠慮なく撞く。青銅色のエネルギーが、数々の塊となって宙に放たれていくようだ。棒ノ嶺を仰ぐ里山の景観が揺らいでいるように見えた。

寺の宿坊で円座を囲んだ。リーダーの坂倉登喜子さん、高田眞哉さんのお話を聞きながら、奥武蔵の丘陵に春を告げる植物に思いをはせる。寺と五十年以上のお付き合いがある坂倉さんに随行したとの理由で、私たちは例外的に宿泊を許された。

食卓の主役は、膳に添えられたミツマタ(ジンチョウゲ科)の花だった。「さきくさの花」の名で万葉集に現れる。「春さればさきくさの花咲(さき)くあれば」という素朴な恋の歌を思い出す。

紙の原料と恋の花と、どちらが早く知られたか。そんなことを問いたが、名物の竹の器で酒を酌む。住職の大野亮雄さんが、山上憶良の歌の中に「三枝(さきくさ)の中に寝むと愛(やさ)しく」との表現があると教えてくれた。「貧しくても愛が先か」。すでに酒が回っていた。

目覚めると、頭の上に寄せ書きの額が掛かっていた。文字を追うと、「明朗山岳会第百回記念ハイキング。昭和二十三年二月十五日」と読めた。墨絵の葉の表に「大」が強調され、主題がカンアオイであることが分かった。ちょうど四十八年前の山行の記念である。私たちとは逆に、子の権現、豆口峠、八王寺の道順だった。「寒あふひひそかに咲きて」坂倉登喜子の署名があった。

翌朝、その坂倉さんは一行の先頭に立っていた。一九一〇年生まれの坂倉さんは五十年間以上、一年に一度は豆口峠への道を歩く。「ほら、ここにカンアオイがあるはず」と枯れ草をかき分けると、小さな褐色の花が、古い友達に挨拶するかのように顔をのぞかせるのだ。

坂倉さんは年間約四十回、エーデルワイスの仲間と共に山に入るといふ。世界の高峰の花を訪ね歩き、老境に入ってから奥武蔵、秩父の低山をしみじみと味わう。カンアオイはひそかに生きているが、ギフトウはすっかり見かけなくなった。歩道は広くなったが、林の手入れは滞っている。いつも通るこの道から、坂倉さんは山と人の関わり合いを見つめている。

夕方に子の権現に着いた。足の神様である。「お賽銭を上げないと、霊験がありませんよ」。坂倉さんの言葉には、真実を言い当てるような確信に満ちた一種の恐ろしさがある。高田リーダーの記録によれば、三水会とエーデル合同の竹寺山行はこれまで二十二回企画され、三回は雪のため中止となった。来年の二月は無事開催の二十回目を記念し、古い仲間を呼び集めるといふ。半世紀ぶりに坂倉さんの絵が添えられた額が掛かるのを楽しみにしたい。

ウエストンとフジヤマ

田畑真一

明治二十四年八月二十八日付け東京朝日新聞に次のような記事がある。

「Tourist's Guide and Interpreter

富田源太郎著近來外国人の渡来するもの多き遂に編者をして此書を出版せしむるに至りたるなりと。西洋諸国にてはガイドブックとて旅客のために供する案内記なるものあり本書は即ち之に倣えるものなりという。

されど本書は外国人のために編著せるものなれば図画の如き第一に余程の注意を要するところなり。又文章に就いても注意を加え過般なるメル新聞紙上に掲載せられたる如きものなるべからず。本書は果たして此の点に欠くるなきか。句点に誤謬なきか。図画に間然する処なきか。殊

に富士山を「フジヤマ」と訳し、嵐山をアラシヤマヒルと訳したる如き此の類いのもの太多（田畑注・多々）なるは如何。日本にフジヤマなるものなし。是れ西洋人が造出したる語なり。直ちに取って之を用う著者の道に於て思想綿密なりと云うべからず」

外国人が富士山を「フジヤマ」と呼んでいたものを本書により、これを一層広め、定着させたやの感じもあると思う。富士山は本来「フジサン」と呼ぶべきだとの批判もある。しかし、「フジヤマ」は古今、外国人向けの呼称であるようだ。

ウエストンが一八九二年（明治二十五年）七月二十七日、英国アルパインクラブへ提出した入会申込書にも、一八九一年十二月十五日の登山記録として「フジヤマ（八五〇〇フィートの所へ）冬季初登頂。真偽不明の地震後の崩落を案内人なしで調査」（拙訳）とある。

なお、ウエストンの一般的な登山業績については拙著『W・ウエストンの信濃路探訪―山々への賛歌』（センチュリー）を参照されたい。自費出版につき残部は自宅にある。お問い合わせていただけたらありがたい。【別記】新聞記事を新字体・新仮名遣いに書き改めたほか、振り仮名を省き、適宜、句読点を付した。

山の切手⑧ 一相山之良

登山者・I



右／1964年12月29日、ソ連発行。カズベクと集団登山。3種セットで、他はハン・テングリとウシバを描く。左／1949年8月7日ソ連発行。登山者を描く最初の切手で、後に続く者を確保する登山者。

登山者を描く最初の切手は、一九四九年、旧ソビエト連邦から発行された。山岳兵やハイキングの切手は、それ以前にイタリア、フランス、ドイツなどから出ていたが、純粹な登山者の切手と呼べるものは、これが初めてだった。

ロシアでは、ソビエト政権樹立後の一九二三年、ニコラエ教授率いる十八名の登山者がカズベクに集団登

頂し、近代登山の幕開けを迎えた。三一年にはハン・テングリ、三三年にコムニズム峰の初登頂に成功、以後集団登山とスポーツ・アルピニズムの華々しい活動が展開されることになる。四〇年代にはマルクス峰とガルモ峰、五〇年代にはボベダ峰をはじめとする天山、パミールの高峰が相ついで初登頂されるに至った。旧ソ連の山岳切手は、同国の登山の進展を示すもので、山を背景にした登山者・登山隊を描くものが多い。

先進の山岳国に比べ、スタートが遅れた中国は、五五年に登山を国の正式なスポーツとして取り上げ、当初はソ連に指導を仰いで、登山者の養成に努めた。五六年にソ連との合同隊の三十一名全員が、ムスターグ・アタに初登頂、引き続きコンゲール・チュビエの初登頂を果たした。ムスターグ・アタには、五九年にも中国隊三十三名が第二登を成し遂げた。六〇年にはエベレスト北東稜、六四年にはシシャ・パンマの初登頂を行い、実力の向上は目を見張るものがあった。五種セットの山岳切手は「中国登山者による偉業」と題されている。

一方、アルピニズム発祥の地であるアルプスの周辺諸国には、登山者の切手が少ない。社会体制の相違と

いってしまえばそれまでだが、登山に対する考え方の違いが、切手にも現れているのが面白い。



1956年7月7日、フランス発行。岩壁をよじ登るクライマー。背景はドリュとエギーユベルト。



1962年6月14日、サンマリノ発行。10種セットで、他に登山者を描くものが2枚ある。



上／1955年6月14日、リヒテンシュタイン発行。ハーケンを打ち込むクライマー。2種セット。右／1965年5月25日、中国発行。ムスターグ・アタと59年の遠征隊。5種セットのうちの1枚。



JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

宮崎支部

「宮崎百山」の発行を目指す

―燃える第十二回総会―

平成八年四月十三日、宮崎市橘荘において開催された宮崎支部総会は、会員三十六人の出席のもとに会場は熱気にあふれ、例年にない盛り上がりを見せた。

■三つの目標の推進

総会に先立ち、他界した会員の冥福を祈って黙禱を捧げたのち、大谷優支部長の熱気ある挨拶となる。支部結成当時の目標は、宮崎ウエストン祭の開催・日本一早い諸塚山山開きの開催による山村地域の活性化の支援・宮崎百山の調査と発行であり、これまでに二つの事業は地域の皆さ

んの協力を得て推進されてきた。

宮崎百山は現在三十数峰をクリアした。三年後の十五周年には発行の予定であり、目標達成のために会員すべてが資料の収集・情報の交換などを積極的に行い、宮崎の山を語り、また山行の手引書となるものを編集したいと意気込んでいる。

■規約の改正と「支部会報」の発行

昭和六十年七月に制定した支部規約を、登山活動・自然保護活動などの情勢の変化に対応できるようにその一部を改正するとともに、支部活動の活性化と情報の交換、および宮崎百山の発刊作業の促進を図るために



熱気にあふれた宮崎支部のメンバーたち

「支部会報」の発行を決定し、支部会員への投稿を促した。

■宮崎の自然を語る

会員は、まず宮崎の自然を理解し、環境の保護を図らなければならないとして、支部会員石井久夫氏（自然保護委員）により「宮崎の自然」を語っていただいた。動植物の苛酷な自然条件での生きざまや、動物たち、とくに託卵鳥の生態、植生の変化などについて、写真・スライドを活用しての解説。会員一同、未知の分野の知識吸収に真摯な姿勢がみうけられ、ある者が、この山岳会には文化がある、とつぶやいていたのが印象的であった。

(井野元 繁)

秋田支部

キナバル登山報告

当支部における平成七年度の小さな海外登山は、東南アジアの最高峰でもあるボルネオ島キナバル山（四一〇一メートル）を選び、十一名の参加者をもって、一月十日より九日間の日程で実施した。

出発の二か月前に急遽決定された企画だが、この山の関係資料は数多いだけに計画しやすく、連絡通知のみで、早々と実施の段階となった。風雪に荒れ狂う一月十日秋田を出

発。東京で一泊し、直行便で常夏のコタキナバルへ降り立った。

現地ガイドに迎えられ、まずは市内観光。翌十二日は、立派な施設の整った登山基地・PHQに入る。

十三日、標高三三〇〇メートルにあるラバンラレストハウスに向かう。登山道沿いに造られた柵やシェルターなどの施設が立派に整備されており、まさに中高年向きのコースである。とくに水洗トイレ化は助かる。多種の草花が咲き乱れる中、十数か国の登山者が往来している様には感心した。

十四日の早朝、ライトを頼りにレストハウスを出発。サヤサヤ小屋から広い岩床をたどり、午前六時五分、先発が最高峰のローズピークに到着する。晴天のもと、雄大な眺めに接し、帰路は途中にそびえる尖峰・サウスピークにも足を延ばした。

レストハウスにもう一泊し、十五日下山。第四シェルター付近で地元秋田のもう一隊九名とすれ違い、案内役の台湾の林氏と一年ぶりの再会となった。

下山後は、高級ビーチホテルに二泊し、無人島や市場、水上住宅などをめぐり、格安で贅沢な登山を終了。十七日に成田へ仙台の夜行バス、十八日の朝バスを乗り継いで厳寒の秋田に向かった。

(佐々木民秀)

図書紹介



カット 中村あや

小堀一政・編

『ザイル』

明治学院大学山岳部
五十周年記念号

一九四〇年（昭和十五年）創設に
なる山岳部の記念誌。

主な内容は山岳部五十年史、国内
主要登山記録、海外主要登山記録、
個人の記録、追悼文などで、五十年
史は年表形式で大学史および時代史
との対照表となっている。

国内登山記録では一九五八年三月
の知床半島積雪期初縦走・海別岳・
硫黄山主脈、一九六三年春山・北ア
硫黄尾根より槍ヶ岳他四編、海外登
山記録は一九七八年のインドヒマラ
ヤ「ヌン東稜」、一九九三年インド
ヒマラヤ「トゥインズ」など四編。

創草期の戦時下で外来スポーツの
スキーが遠慮させられたとき、軍隊
スキーの講習という名目で、38式歩
兵銃と帯剣で武装して蔵王へ行った

話は興味深い。（大橋 晋）

一九九五年六月 明治学院大学体
育会山岳部 二〇七ページ

富山県郷土史会・校注

『越中安政大地震見聞録』

本著は、越中・飛騨地方に大きな
被害を与えた安政の大地震（一八五
八年）にまつわる古写本を現代語に
訳したものである。富山藩の上層藩
士や地方役人の報告書に始まり、奥
山の調査に入った立山の芦峯衆の報
告書まで、広い地域・階層の人々が
見た地震の姿を生々しく伝えている。
実はこの地震で、大鷲山をはじめ
とする立山カルデラの火口壁が崩れ、
常願寺川の上流をせきとめるのであ
る。これが副題にもなっている「大
鷲崩れ」である。そして、それが二
回にわたって決壊し、立山カルデラ
内の立山温泉を押しつぶしながら、
下流に押し寄せる。その死者は千八
百人ともいわれている。また、この
「大鷲崩れ」の後遺症ともいうべき
立山砂防工事が、毎年、数億の巨費
を投じていまだに続けられていると
のこと、自然の力は恐ろしい。

それにしても、大変な労作である。
地方で地道に研究を続ける著者の努
力には頭が下がる。（三好まき子）
一九七六年六月 KNB興産出版

部発行 二三一ページ 二千八百
円

大森薫雄・著

『雲の上の診療所』

副題は「慈恵医大槍ヶ岳診療所四
十五年の記録」。槍の肩の小屋、現
在の槍ヶ岳山荘の一隅に慈恵医大
山岳部・山の会がささやかな診療所を
開設したのは、戦後間もない一九五
〇年のことだった。北アルプスの医
療奉仕施設はそれ以前にもあったし、
その後も各地に開設されたが、槍の
肩は海拔三〇六〇メートル、慈恵の
が一番えらいことは間違いない。

内容を紹介する余裕がないので、
強く感じたことを列挙する。

面白い。臨場感にあふれている。
医師やその卵や看護婦、小屋主と従
業員、そして患者（登山者）の生々
しい息遣いが聞こえる。登山医学の
実践的教示がある。山の匂いが懐か
しい。戦後五十年間の日本社会と山
の変容が特殊な診療所の変化の過程
に凝縮されていて、歴史の定点観測と
しても優れた記録となっている。

そして何よりも槍の医者は登山者
でもあること。だから奉仕と犠牲の、
血と汗の回顧が苦労誌にならない。
これは大森ドクターの楽しげな筆致
の手柄だろう。（平井吉夫）

一九九五年十一月 いしずえ発行
一三八ページ 千七百円

愛知学院大学山岳会・湯浅道男・編

『EVEREST From South Pillar』

一九九四年五月、エベレスト頂上
に立った日本人。登り尽くされた感
のある山だが、彼等の登頂はサウス
ピラーという未踏の最難関ルートか
らのものだった。愛知学院大学山岳
部が長年あたためてきたものだった
だけに、この成功は関係者・隊員に
とってひとしお感慨深いものがあっ
たことだろう。大学山岳部が凋落を
続ける中で、単一大学山岳部がなし
遂げたことに對する自負がうかがえ
る報告書だ。さらに大学山岳部に関
係する者にとってうらやましいと思
えるのは、支援隊とはいえ数名もの
現役部員の参加がみられることだ。
これは「若きクライマーを世界の最
高峰に」とする総隊長湯浅氏の思い
と、これを受け止め次の世代へと伝
えてゆく人々の熱意が、ブロードピ
ークからシシャパンマへと、そして
今回のエベレストの登頂へと導いた
のだろう。

歯学部を有する強みを生かして、
歯科事情調査・診療奉仕を行っている
のは先の海外登山と同じだが、今
回はさらにエベレスト街道のゴミの

撤去を行っている。報告によれば三万本の乾電池を日本に持ち帰ったとか。私たちがいかに自然を犯していたかの証拠となる。この三万という数字から想像すると、登山隊やトレッカーが持ち込む処理されにくい化学物資や、低温のために分解されない放置された生ゴミの数値は恐ろしいものになると思われる。これから行おうとする登山という行為には、それが海外であれ国内であれ、常にこのことを念頭におくべきだと、本書は警告を発しているかのようだ。

(泉 久恵)

一九九五年十一月 愛知学院大学
山岳会発行 成文堂発売 二〇〇
ページ 二千五百円

立松和・著

ヤポネシア抒情紀行

『神様のくれた魚』

自然保護をテーマとしたもので、人間社会の進歩や文明とは切り離して、自然の中に生きてきた人々にスポットを当て、日本各地を歩き、その自然を大切にしてきた人々のルーツを追い求めている。日本列島をヤポネシアと命名。阿寒湖の森を守り抜いた人、白神山地のマタギ、九州椎葉村の焼き畑農業を営む人、石垣島の農業ダムなどなど、土地の人々

と話し合うことで、破壊された自然を守ることの大切さを訴える。

題字の「神様のくれた魚」は、自然と共に鮭を神からの贈り物として大切にしてきた北海道アイヌ漁民の話である。下流に養魚場ができたことを理由に一帯が禁漁区となる。片目のアイヌが、上流でこれまでと同じように鮭を漁した科で逮捕される。彼は言い知れぬ激怒と悲しみで、見えないほうの目からも涙を流すというもので、感動する一文である。

文明とは、自然に対し何をしているのか、自然がそこに住む人々をとおして語りかけてくるそんな一冊である。

一九九五年十二月 山と溪谷社発行 A5判 二七〇ページ 千五百円

(林 栄二)

日本山岳会丹水会・編

『丹水二号』

十五周年記念誌

丹水会が十周年誌に続いて発行。

近藤信行さんの巻頭の言葉に始まり、特別寄稿として「丹沢からヒマラヤへ」渡邊玉枝さん、「今西錦司先生の丹沢行」石川治郎さん、「杖をついて歩こう」大森薫雄さんが掲載されている。続いて座談会「幹事役もまた楽し」で幹事役を通しての丹水会のこぼれ話のあれこれが語ら

れ、あゆみでは一九九〇年から一九九五年の集会、幹事会の記録が収められている。「丹沢と丹水会と自然」とでは丹水会に集う人たちが三十八名の寄せる思いが綴られる。

付録として丹水会講演記録(再録)一一〇ページ余りが続く。丹沢に縁の深い佐藤松雄、山岸猛男、漆原俊さんの「丹沢回顧」、森武昭さんの「山岳地域における自然エネルギーの利用」、堀井昌子さん「中高年登山万歳」などなど、さすが丹水会、人脈の広さを感じさせる講演集である。

丹沢をより深く知る参考にもなる、手作りの温もりが感じられる一冊である。

一九九五年十一月 日本山岳会丹水会発行 二二八ページ 千五百円

(細井澄子)

*ルームにあります。

熊谷権・著

『アルプスの氷河を滑る』

著者の山スキー狂いぶりはつとに有名であり、北海道、グリーンランドそしてアルプスを長年にわたって滑りまくっているベテランである。

それぞれの章が臨場感あふれるツアーレポートとなっている。アルプスでのスキーの楽しさのすべて、コースの変化、ガイドとのやりとり、

山小屋でのくつろぎが書かれており、カラフルな挿絵(絵は著者の本業)が味わいを添えている。技術的なポイントやツアーの知恵が随所に語られているので、オートルートなどアルプスでスキーを堪能したい人のよき参考書にもなる。(松沢節夫)

一九九五年十二月 白山書房発行 二五一ページ 千九百円

阿部曉雄・著

『秋田六百三十一山全登頂記録』

国土地理院発行の二万五千分の一地形図に記名されている秋田県内のすべての山に登った著者が、およそ六年間で登ったその記録を収めたもので、全六百三十一山を紹介している。その大方は登山価値のない雑木や藪山で占められ、本来の登山書とは趣を異にしている。山の高低やよし悪しを考えず、ただひたすらに故郷の山を愛し、その大部分を単独行で登るという行為は、恐らく日本初と思われる。通常の登山観では完全は無理で、他人の力を借りてヒマラヤへ登るより難しいかもしれない。何より暇と忍耐が必要であろう。

この本は、高さ、呼び名順、地図名などからの索引が可能であり、ピークハンターには便利である。

(佐々木民秀)

[IN SEARCH OF LIMITS]

アルプス四〇〇〇メートル峰を登る

英国軍 (Scotts Guards) 近衛兵団と SAS Reserve 空軍予備役各三名の隊員とサポーター隊九名) を率いて著者は、ALP4000 隊を編成。ケント公をスポンサーに迎え、軍の組織力と行動力を発揮して、夏シーズン五ヶ月中にアルプスの四〇〇〇メートルを超える六十一峰を目指し、スイス軍の協力を得て、スキー登山を含め四十八峰の登頂を達成した。

本書はその報告文だが、これからアルプスを目指す手引書としても有効である。物語風にまとめられていて楽しめるが、所要所に著者の思いが綴り込まれている。

本文はケント公の序文、著者の感謝の文に始まり、第一章は遠征隊を計画・実行する苦労話、各峰の登山を十七章に分割。題目にちよつと工夫がしてあり「マッターホルンに懸る満月」というものもある。十八章のエピローグで終わっている。

付録として、①登頂概要②参考地図③登頂グレード④装備⑤スポンサーが細かく記録として記されており、これですべての概要が分かる。

(三沢 三)

Hodder & Stoughton £17.99

書籍受入報告 (1996年3月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
北海道雪崩事故防止研究会(編)	最新雪崩学入門：雪山最大の危険から身を守るために	157pp/22cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
いがりまさし(写真)	日本のスマイル：写真検索(山溪ハンディ図鑑 No.6)	247pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
右川清夫	山と旅と想い出と	178pp/22cm	右川清夫(私家版)	1996	著者寄贈
中村保	ヒマラヤの東：雲南・四川、東南チベット、ミャンマー北部の山と谷	330pp/22cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
松崎中正	山おちこち	230pp/20cm	楽山斎(らくざんさい)	1996	著者寄贈
松崎中正	わが山路：松崎中正山行譜	158pp/27cm	楽山斎(らくざんさい)	1996	著者寄贈
京都大学山岳部(編)	追悼：加納洋君の雪に捧ぐ	78pp/21cm	京都大学山岳部	1963	久野行雄氏寄贈
日本山岳会東海支部(編)	名古屋周辺山旅徹底ガイド：台高・鈴鹿・奥美濃	256pp/22cm	中日新聞本社	1995	編者寄贈
日本山岳会東海支部(編)	続・名古屋周辺山旅徹底ガイド：裏木曽・東濃・奥三河	266pp/22cm	中日新聞本社	1996	編者寄贈
早川慎治	後方羊蹄山登攀記	255pp/20cm	北の野帳社	1996	著者寄贈
酒井國光	春山(ヤマケイ登山学校 No.7)	190pp/21cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
平井一正	初登頂：花嫁の峰から天帝の峰へ	358pp/20cm	ナカニシヤ出版	1996	出版社寄贈
M・ファンティン(編)	ヒマラヤ巨峰登頂記：8000m峰14座	441pp/23cm	あかね書房	1969	購入
Prames	Refugiōs Pirenaicōs	216pp/21cm	Prames		発行者寄贈
A C C 紫蘭会(編著)	紫蘭会10周年記念号	96pp/26cm	A C C 紫蘭会	1985	発行者寄贈
" 紫蘭会(編著)	紫蘭会15周年記念号	62pp/26cm	" 紫蘭会	1990	"
" 紫蘭会(著)	ガンボカラ・トレッキング 1980	40pp/26cm	" 紫蘭会	1981	"
" 紫蘭会(著)	ニュージーランド・トレッキング 1988	44pp/26cm	" 紫蘭会	1988	"
" 紫蘭会(著)	天山トレッキングの旅 1988夏	40pp/26cm	" 紫蘭会	1988	"
" 紫蘭会(著)	ピレネー・トレッキング 1989	32pp/26cm	" 紫蘭会	1989	"
" 紫蘭会(著)	チロル・スイスの山旅 1990	36pp/26cm	" 紫蘭会	1990	"
" 紫蘭会(著)	フランス・ピレネーの山旅 1992	44pp/27cm	" 紫蘭会	1992	"
" 紫蘭会(著)	ネパール・トレッキング16日間 1993	68pp/26cm	" 紫蘭会	1993	"
" 紫蘭会(著)	トムラウシ山北海道トレッキング 1993夏	26pp/26cm	" 紫蘭会	1993	"
石井光造	こだわりの山DAS：山歩きデータバンク	166pp/22cm	白山書房	1996	出版社寄贈

会務報告

三月理事会

日時 三月十四日(木) 十八時～二十時五十分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」村木会長、中村、斎藤、宮下各副会長、大屋、吉永、中川、大谷、松浦、伊藤、南井、渡邊、溝口、田邊、宇田川各理事、川崎、石橋各監事、小倉、村井、神崎各常任評議員

「委任」水野、堀井、山本、熊崎、大蔵各理事、大倉、大森、重廣各常任評議員

【審議事項】

(一) 資料の貸与期間更新の件 大屋
現在貸与展示中の「マナスル登山使用用具」について、四月一日～平成九年三月三十一日の借用期間更新申請が秩父宮記念スポーツ博物館よりなされた。

(二) 映像使用許可の件 承認
「午後〇〇おもしろテレビ」

三月二十一日(木)十三時～十三時十五分放送番組で、深田久弥の生涯VTRに昭和三十一年「ヒマラヤ・マナスル初登頂に成功」の今西壽雄隊員の山頂の映像使用許可願いが(株)日本テレビ放送網より申請された。

(三) 上高地山岳研究所の件 承認
平成八年度運営計画に当たり、利用規定・管理規定の一部見直し(資料別紙)を行う。平成八年度開所は四月二十九日の予定。

(四) 細則の一部改定の件 承認
平成七年度総会承認事項・会費改定に伴う細則第十一条・第十二条の改定を四月十八日(木)の評議員会の審議を経て行う。

(五) 平成八年度事業計画(案)・収支予算(案)の件 吉永
資料(別紙)提案、三月末日までに文部省に提出する。

(六) 名義後援の件 承認
日本山岳会青年部K2登山隊の支援を目的とするトレーニング・ツアー計画について日本山岳会の名義後援要請が(株)ウェック・トレックよりなされた。

【報告事項】
(一) 秩父宮記念学術賞 大屋
三月四日、春田俊郎氏(会員番号四四八五)、大貫良夫氏(会員番号五四二四)が受賞。

(二) NMA会長来室 大谷
北京で開催されたアジア山岳連盟会議の帰途、ネパール山岳協会会長ダワ・ノルプ氏が三月十九日(土)来室。

(三) K2登山隊 山本隊長
登山保険の契約締結完了、母体大学の連絡窓口の設置、行動日程の計画などが、同行の松原副隊長とともに説明された。

(四) 図書室 水野(代理) 大屋
新刊書の増加などに伴い書庫が手狭となり、一〇四号室にロッカー新設。この機会に図書以外のものの移動と重複古書・バックナンバーなどの見直しを、図書管理委員会と打ち合わせながら対処していく。

(五) 財産目録など 大屋
決算期を控えているので、担当理事は事前にチェックをお願いしたい。

●資料委員会
一〇四号室に棚・ロッカーを設置することに伴って、委員会として勉強会を開き対処していく。

●総務担当より
①山岳傷害保険申し込みの現況は三月十一日現在二百二名である。四月以降の申し込みの方法などについては「山」に広報する。

②会員名簿は各自に届いたはずだが内容についての申し立て(誤記など)は事務局宛にお願いしたい。
③三月十六日(土)十四時～十九時、第二十二回新入会員オリエンテーションの開催にあたり、各理事の出席をお願いする。

●総務委員会
・二月二十日―会員名簿発刊、『山岳』に同封して発送。

・二月二十四～二十五日―全国支部事務局担当者会議を水道橋グリーンホテルで開催、「九十周年記念行事を振り返ってと百周年の夢」のテーマで論議、全国二十三支部が出席し、盛会だった。

・三月十六日―十四時よりルームで新入会員のオリエンテーションを開催、四十三名出席予定、記念講演は「ヒマラヤを越えるツル」講師は松田雄一会員。

・四月上旬―「日本山岳会入会のおり」発刊。

・五月十八日―十時支部長会議、十四時日本山岳会通常総会、水道橋グリーンホテル。

味の技、心でつくる



むさしき 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
むさしき 麹町店
(有楽町線麹町駅西側)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさしき 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさしき 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

●集会委員会

・四月十四日―サクラハイク―九五
年に入会した人を中心に奥多摩・
陣馬山山頂で餅つき。
・五月二十五―二十六日―若葉会山
行、ベースは新潟県入広瀬村、二
十回記念行事あり、二十五日越後
金城山、二十六日浅草岳登山。

■会員異動

物故

飯田輝英(一八五〇) 8・3・6
福岡一馬(二五六五) 8・3・8
退会

池沢幸子(一〇二五八) 8・3・31
服部 博(七〇五六) 8・3・31
鷺見豪志(六四四八) 8・3・31
松沢清乃(九八四二) 8・3・31
阿部喜久治(九九一四) 8・3・31
田村説三(一〇二三四) 8・3・31
金子利三(九七三四) 8・3・31
森田準之助(九〇四八) 8・3・31
終身会員

新妻 徹(五八六八)
山村康一(四二九四)
内村泰久(七七二二)
宗實二郎(六〇九五)
早川 晃(五七一八)
篠田一郎(四三四五)
木戸繁良(五七九一)
岩渕泰郎(四〇九一)
中原良枝(七四九五)

ルーム日誌

3月
1日 図書委員会
4日 総務委員会
5日 フィルムビデオ委員会 山岳
編集委員会
6日 青年部 山の自然学研究会
7日 海外連絡委員会
8日 フォトビデオクラブ
11日 図書委員会 アルパインス
キークラブ
12日 山研委員会 アルパインス
ケッチクラブ アルパインス
キークラブ
13日 常務理事会 ジャック93会
14日 理事会 集会委員会
15日 指導委員会
16日 総務委員会
18日 総務委員会 資料委員会 遭
難対策委員会
19日 三水会 高所登山委員会
21日 医療委員会
25日 フィルムビデオ委員会
26日 自然保護委員会 科学委員会
アルパインスケッチクラブ
27日 データバンク委員会
28日 集会委員会 山岳編集委員会
29日 海外連絡委員会

3月来室者 654名

INFORMATION



◆古道を訪ねて―妻坂峠を越えて

新緑の美しい季節です。一緒に
古道を訪ねませんか。
日時 六月八日(土)
コース 西武秩父駅―生川―妻坂峠
―名郷
集合 西武秩父駅改札口・十時
雨天決行

*参加者は当日、直接集合場所にき
てください。申し込みは不要です。
◆一九九六年度東北ブロック集会
秋田支部

本年度の東北ブロック集会を、秋
田市郊外にそびえる信仰の山「太平
山」で開催します。是非ご参加くだ
さい。

日時 六月二十二日(二十三)
受付 秋田市仁別クワドーム・サ
ブリン(Tel・〇一八八―二七
―二〇〇一) 十五時―十七時
登山コース 太平洋山奥岳・赤倉山

①山頂往復コース

旭又―山頂 (片道三時間)

②縦走コース

旭又―山頂―赤倉―旭又
(七―八時間・健脚向き)

宿泊所 秋田市森林学習館(Tel・〇
一八八―二七―二二二)

費用 A・一千万円(懇親会、宿泊、
朝食、昼食、入浴代を含む)

(先着三十名宿泊所あり)

B・八千円(シュラフ持参者
宿泊所の隣接地にテントを張
ります。懇親会、朝食、昼食、
入浴代を含む)

申込

日本山岳会秋田支部事務局
岡田光行(Tel・〇一〇・秋田市
保戸野中町七―一四 Tel・FAX
〇一八八―二三―三〇八五)

締切

六月五日・参加費を添えてお
申し込みください。実施要項、
案内図を送付します。

◆講演会のお知らせ

科学研究委員会

今年は第一次日本南極地域観測隊
が発足して四十年目に当たります。
南極観測は近年の地球環境問題の顕
在化に伴い、重要性が高まっていま
す。その現況を内陸氷床に新たに建
設されたドームふじ観測拠点と深層
掘削計画を含めてご紹介いたします。
日時 七月三日(水) 十八時三十分
場所 日本山岳会ルーム

演題 南極観測と地球環境

講師 農林水産省北陸農業試験場・

気象資源研究室 横山宏太郎

(第三五次南極観測越冬隊長)

◆カジタのアイゼン・ピッケル

講演会 集会委員会

登山家であり制作者でもある梶田氏に、山を登ることを通して制作してきたアイゼン・ピッケルについて語っていただきます。また、カジタのピッケル・アイゼンの使用者側の話も聞かせていただこうと思います。

日時 七月九日(火) 十九時
場所 日本山岳会ルーム

演題 ①カジタックスの経緯 ②ピッケル・アイゼン製造の苦勞

話 ③用具の売れ筋からみた山岳界 ④チタン・アルミアイゼンの長所・短所 他

費用 千円(講演会終了後、梶田氏を囲んで懇親会を開きます)

◆夏の写真撮影会

フィルムビデオ委員会主催

アルパインフォトビデオクラブ後援

恒例の写真撮影会を東京郊外の五日市で開催します。多数ご参加ください。なお、登山しながらの撮影です。弁当、雨具など登山の用意でこ

参加ください。

日時 七月十四日(日) 小雨決行

場所 東京・奥多摩「浅間嶺」

集合 JR五日市線武蔵五日市駅改札口 九時四十分

費用 五百円(保険料)

締切 七月五日までにハガキでフィルムビデオ委員会へ。

◆早池峰の花を愛する女性の集い

早池峰のウスキソウ保護を願って合唱会を催します。男性も大歓迎です。

日時 七月十三日(出)

集合 登山口・河原の坊 八時

内容 小田越コース登山 山頂で合唱会など

問合せ 坂倉登喜子(二一六七 杉並区下井草五一〇一五)

エーデルワイスクラブ)

◆藤江幾太郎。尾瀬油絵展

尾瀬、松枝岐油絵作品(五〇号ハ号)を展示します。

日時 六月一日(出)八月三十一日(出)

九時~十七時

場所 福島県南会津郡松枝岐村

村立作品展示場(入場無料)

◆藤江幾太郎・山の画展第四十一回

ネパールおよび国内の山と旅で得

た油絵作品二十点を発表します。

日時 七月一日(月)~七日(日) 十一時

~十八時三十分(最終日十七時)

場所 朝日アートギャラリー(JR有楽町、地下鉄丸ノ内線銀座C四・五出口)

◆創立六十周年記念・日本山岳画協会展

「山」を愛する画家たちによる毎年恒例の展覧会です。三〇号大の作品を中心に二十五点を展示します。

日時 七月九日(火)~十五日(日)

十一時~十八時三十分(ただし十四、十五日は十七時まで)

場所 朝日アートギャラリー(中央区銀座一〇一 TEL・〇三三五六七 一六七二)

*「創立六十周年記念誌」(一部五百円)を販売します。(入場無料)

◆牧潤一「ヒマラヤ・パノラマ展」

ネパール・ゴキョピークから見たエベレストを中心にした大パノラマ、色鉛筆によるシシャバンABCでの現場スケッチなど、水彩と油絵によるヒマラヤ各地のパノラミックな山岳風景約二十点を展示。

日時 六月四日(火)~十日(月)

十一時~十八時三十分(ただし九、十日は十七時まで)

場所 朝日アートギャラリー(入場無料)

◆編集後記◆

◆前月号に引き続き、「編集後記」のスペースがとれました。締切り後の「お知らせ」の原稿の割り込みがなかったためで、大変よい傾向です。

「お知らせ」は会員間の大事な情報源ですので、ほかの原稿を削り「編集後記」の原稿をボツにしたりして掲載するように努めています。原稿送付の締切日を守っていただくことを重ねてお願いします。

◆原稿締切日は、発行月の前の月の十日です。開催日、参加申込日が発行日(毎月二十日)の後にならないようお気を付けてください。

なお、原稿は「十六字詰め・縦書き」でお願いします。(伊藤 敏)

訂正 四月号九ページ一段目二十六行目の強度は強戸の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

日本山岳会会報 山 612 号

1996年(平成8年)5月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社